

Newsletter on MAB Activity of Japan
Japanese Coordinating Committee for MAB

“Man” は性的差別語？

有賀祐勝

昨年（1996）11月、パリのユネスコ本部で開催された第14回 MAB 国際調整理事会で MAB (Man and the Biosphere) の “M” が論議された（本号の同理事会報告参照）。英語を常用語とする国々で MAB の “Man” が性的差別との関わりで問題にされるおそれがあるという。なるほど、 Man は「人、人間」と「男」いう意味を持っている。また、「おとな」という意味でも使われる。 Man については、大学 2 年の時に英語の先生から “Man embraces woman.” の embrace は「包含する」という意味なのだが、その他に勿論「抱擁する」という意味もあると教えてもらったこと、また、生態学の講義で、生物体の元素組成の表の中でヒトの分析値があり、そこに “adult man” とあるのは「成人男子」のことであると教えてもらったことなどを、この論議を聞きながら思い出した。

近年、国際会議や国際学会では議長あるいは座長を Chairman と呼ばずに Chairperson とか Chair とか呼ぶのが通例になりつつある。その昔、まだ今のように性的差別が余り問題にされなかつた頃、国際学会で女性が司会するセッションで発表するはめになり、最初の挨拶の “Thank you, Mr. Chairman.” の代わりに何と言ったら良いか大変困惑したことを思い出す。辞書を開いてみると Madam Chairman の他 Chairwoman というのも載っているが、後者を使うのに出会ったことは全くない。ついでに取り上げると、 “Ladies and Gentlemen” の Gentleman に対して

Gentlewoman も辞書には載っているが、何故か使うのを聞いたことがない。不勉強な私は、 Gentleman と Gentlemen の発音が同じであることを知ったのは10年ほど前のことである。残念ながら、英語の時間には Man と Men の違いしか教えてもらわなかった。

MAB は、フランス語では “L’Homme et la Biosphère”，ドイツ語では “Der Mensch und die Biosphäre”，スペイン語では “El Hombre y la Biosfera” であるが、日本語では「人間と生物圏」、中国語では「人与生物圏」としている。我々日本人は、外国語を学ぶ時、多くの場合その性・数・格に大いに悩まされる。日本語では、それらがしばしば大変あいまいだからである。性について言えば、生き物以外の物を性的に区別することはまずない。しかし、多くの国々の言葉では、無生物についても性が存在する。何故それほど性に執着（?）するようになったのであろうか（無意識であったとしても）。それだからこそ性的差別が生まれるようになったのではないかとさえ思いたくなることがある。

“Man は gender-neutral である”との結論で一安心した。「差別」は言葉の問題も大いに関係するが、差別用語を使わなければ「差別」がなくなるわけではないであろう。差別用語を使わなくとも心の中に差別意識をもつているならば「差別」は決して無くならないであろう。大切なのは、心（mind）の問題である。

（東京水産大学教授）

第4回東アジア生物圏保存地域研究協力会議 (EABRN-4)

鹿児島・屋久島 1996年10月21～25日

山 口 征 矢

第4回東アジア生物圏保存地域研究協力会議が、1996年10月21日から25日の日程で、鹿児島市および屋久島で開催された。中国（第1回・第2回）および韓国（第3回）で開催された3回の会議に続くもので、東アジア地区の生物圏保存地域（Biosphere Reserves）のネットワーク化の枠組みについて討議し、その実現を図ると共に、専門家による屋久島生物圏保存地域の観察と評価を行うことを目的として開かれたものである。参加国は、中国、モンゴル、韓国、日本のほかオブザーバーとしてタイからの参加があり、ユネスコ本部、ジャカルタ事務所および北京事務所からの参加者を加えて全体では24名の参加があった。当初予定されていた朝鮮民主主義人民共和国の参加は、残念ながら直前にキャンセルされた。わが国からの参加者は、有賀祐勝（東京水産大）、大沢雅彦（千葉大）、鈴木邦雄（横浜国大）、高井康雄（東京農大）、長野敏英（東京農大）、中村武久（東京農大）および山口のほか、文部省から岩本 渉国際学術課長と倉西美由紀国際学術課協力研究係長が参加された。本会議は、鹿児島大学の主催で10月19日から25日に開催された、国際シンポジウム「世界の常緑湿潤林生態系と人との共生－世界自然遺産屋久島から－」のセッションの一部を構成するもので、MAB関連会議は10月21日にセッション3、および10月24日にセッション5として開かれ、この間には屋久島の現地見学と討論が行われた。以下にその概要を報告する。

第1日午前：Hill ユネスコ・ジャカルタ事務所長の開会宣言に続いて、議長に有賀教授が選出された。参加者の紹介の後、文部省学術国際局国際学術課長岩本 渉氏の歓迎の挨拶があり、引き続いて Hill 所長の挨拶と、MAB活動および生物圏保存地域についての簡単な講演が行われ、議事日程が原案通り承認された。中国、モンゴル、韓国、

日本の順でそれぞれの国のMAB活動、とくに生物圏保存地域に関連した活動の現状と今後の方向について報告された。また中国のZao Xianying教授から、東アジア生物圏保存地域ネットワークの活動の一つとして企画され、実行に移されている、中国の長白山生物圏保存地域における小型プロジェクトについてその進捗状況が報告され、またタイのChoob Khemnark教授により、国際沿岸海洋生物圏保存地域の立案計画について、その概要が説明された。

第1日午後：パリ・ユネスコ本部のHan Qunli氏による講演“Networking of International Biosphere Reserves and EABRN”に引き続い、東アジア生物圏保存地域ネットワークの今後の活動について検討され、研究協力活動を強化しながら継続すること、次回第5回の東アジア生物圏保存地域ネットワーク会議をモンゴルで開催することが決定された。

第2日午前：国際シンポジウム参加者と共に、鹿児島港よりジェットフェリーで屋久島へ移動し、田川日出夫鹿児島大学名誉教授の案内で、屋久島をフィールドとした環境学習の拠点として新設された屋久島環境文化村センターを見学した。常設



屋久島森林生態系保護地区の案内板。地図には地域区分が示されている。



田川日出夫鹿児島大学名誉教授の説明を聞く参加者

展示および映像による、屋久島の自然と人々の暮らしについて概要の説明があった。14×20m の超大型スクリーンを用いた、70mm フィルム映写による屋久島の自然の紹介は圧巻であった。

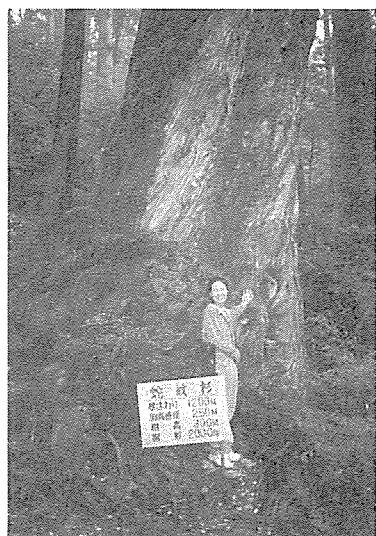
第2日午後：大沢雅彦千葉大教授の案内で、川原地区の照葉樹林内に設置された林冠観察プラットフォームや、長期観察のためのコードラートを見学した。この地区は屋久島生物圏保存地域および世界遺産登録地域の西端域に当り、良好な森林植生が残された地区で、プラットフォームは多くの参加者の注目を集めた。また帰途には、栗生川河口地区で北限のメヒルギ群落を見学した。



照葉樹林について大沢雅彦千葉大学教授と甲山隆司北海道大学教授の説明を聞く参加者

第3日：朝から雨模様の天候となったが、太忠岳南面の標高1000～1300m に広がる屋久杉ランドの観察が行われた。バス道沿いの紀元杉を見学後、3班に分かれて屋久杉ランド内を約2時間散策した。歩道や標識はよく整備され、随所に解説板が設置されており、訪問者が迷う事なく自然に

親しむとともに学習出来るよう配慮されていた。ただ入口の案内看板以外に園内の地図がなく、このため歩いている現在地が屋久杉ランドのどの位置に当たるのかを把握するのが困難であった。適当な縮尺で、各種の情報を盛り込んだ地図を入園者に配布することは自然観察の基本であり、この点が残念であった。荒天模様のため、午後は小杉谷の見学を取りやめて下山し、屋久島世界遺産センターおよび屋久島環境文化研修センターの見学が行われた。両施設とも1996年夏に開設されたばかりの最新の施設であるが、世界遺産センターでは屋久島の自然をわかりやすく楽しみながら学習できるように、さまざまな技術を用いて工夫された展示が目についた。展示法の多くは参加者にとって強い印象を与えたようで、あちこちで賞賛の声が聞かれた。



樹齢2000年の蛇紋杉

第4日午前：シンポジウム参加者は志戸子のガジュマル林の見学へ向い、MAB会議は、屋久島環境文化研修センターにおいて、2日間の野外現場視察の結果に基づいて屋久島生物圏保存地域の活動と管理について評価が行われた。参加者から主に次のような意見が出された。

(1) 屋久島生物圏保存地域は良好な状態で維持管理されており、アクセス道路、関連施設等も非常によく整備されている。とくに野外教育施設は数が多く、十分整備されていると評価される。

(2) 屋久杉ランド内の歩道、案内板、説明板等

大変よくできているが、今後外国人の訪問者が増えることが予想されるので、英文の案内や説明板も是非ほしい。また、植物の名前は学名を併記してほしい。

(3) 研究調査のためのサイトがよく確保されており、評価される。

(4) この生物圏保存地域の管理には、複数の省庁や県等が関係しており、5年毎に維持管理のための話し合いをしているとのことであるが、有効な維持管理のためには頻度の高い話し合いを定期的に行う必要がある。

(5) 地域住民との関係があまり明白でない。生物圏保存地域は地域住民の生活に役立つものでなければならない。

(6) この地域が世界遺産に指定されていることはよく知られ、表示もはっきりしているが、MABの生物圏保存地域として指定されていることが表に全く出てこないのはなぜか。地域住民はどの程度知っているのか。

最後に、今後の活動や研究協力について討論され、連絡や意見交換を更に密にする必要性が指摘され、E-mail等を用いたネットワークを更に強化するよう努力することが合意された。また、次回のモンゴルにおける会議に向けて早めに準備を開始することになった。

屋久島は現在少なくとも6通りもの保護制度の指定（原生自然環境保全地域、国立公園地域、特

別天然記念物、森林生態系保護地域、生物圏保存地域、世界遺産）を受けており、それぞれ異なる省庁が関与してその管理が行われている。屋久島の自然を保存しながら、有効に活用しました地域住民の生活活動との調和を図るには、参加者の指摘にもあるように、今後これら異なるマネージメントをどのように調整していくかが最も重要な課題である。この点で日本の行政的立ち後れは否めない。会議を通して、東アジア地区の生物圏保存地域における諸活動への関心の高さと、それらの活動の連携を強化し地球環境保護に貢献しようとする参加各国の熱意が強く感じられた。21世紀へ向け日本においても、早急に生物圏保存地域に対する取り組みを検討・強化していく必要があると思われた。

荒天のため予定のジェットフェリーが運休となり、最終日鹿児島港への到着が遅れたが、会議は滞りなく無事終了した。今回は国際シンポジウムとの併催であり、会議前日には多くの会議出席者がシンポジウムに参加し、常緑湿潤林生態系とそれを巡る人々の生活についての報告を聞く機会に恵まれた。また屋久島での現地視察や懇親会など双方の参加者の交流が可能で、有意義であった。準備に当たられた鹿児島大学の組織委員会の人々にあらためて感謝の意を表したい。

（東京水産大学教授）

第5回 UNESCO/MAB 東・東南アジア地域セミナー：ECOTONE V

ベトナム・ホーチミン市（1996年1月8～12日）

有 賀 祐 勝

標記セミナーが1996年1月8～12日にベトナムのホーチミン市で開催され、15カ国から93名が出席し、沿岸域のエコトーンに焦点をあて、特に荒廃したマングローブ林の修復の具体的手段等について討議が行われた。わが国からの参加者は、有賀祐勝（東京水産大学教授）、荻野和彦（愛媛大学農学部教授）、岸本 司（㈳沖縄国際マングローブ協会研究員）、浅野哲実（マングローブ植林行

動計画研究員）の4名であった。

開会式の後、本題のセミナーに入り、副題「東南アジア地域のマングローブの保護、持続的利用、及び修復への地域集団の参加」のもとに1月8～10日の3日間にわたり、

セッション1：地域集団の参加—原理と実行及び問題点

セッション2：マングローブの保護、持続的利



ECOTONE V セミナー開会式（ベトナム・ホーチミン市フローティングホテル）

用及び修復における地域集団の 参加—東南アジアでの実例

セッション3：マングローブ荒廃の結果と地域集団の修復への参加

セッション4：概念モデル、研究機関の枠組み、 及び機関のネットワーク

の順に、オーストラリア、米国、ベトナム、中国、インドネシア、日本、マレーシア、フィリピン、タイ、インド、ユネスコ等の代表からそれぞれ東南アジア地域のマングローブの保護と修復に関して地域社会や団体が参加する際の原理原則、参加の実例、問題点、今後のあるべき姿などについて報告があり、個々の発表に対する質疑と討論及び各セッションのまとめのための討論等が活発に行われた。これに引き続いて NGO パネルがあり、10の NGO から東南アジア地域のマングローブの保護、持続的利用、修復などに関するそれぞれの活動と経験について報告があり、質疑と総合討論が行われた。

本セミナーにおける最大の論点は、主としてエビ養殖のために広い範囲にわたってマングローブが伐採されて養殖池が作られるが、何年か後には病気の発生その他の理由で養殖池が放棄され、更に新しくマングローブが伐採され新しく養殖池が作られるという経過をたどってマングローブ林が荒廃してきたこと、これをどのようにして止める、荒廃した土地にどのようにしてマングローブ林を再生させるかということであり、特に地域住民の理解を得て地域での彼らの生活を支えていくような形でいかにマングローブ林の再生をはかる



ホーチミン市郊外のマングローブの観察

るか、またそのためにはどのような形の支援活動が良いのかということであった。この点で、今回の地域セミナーで初めて NGO の参加を実施したことは、彼らにも大いに歓迎されたし、また彼らの相互理解と交流の場が作られたことからも大きな成果があったと思われ、MAB 活動が今後成果をあげていくためには NGO との連携も大きな課題である。

1月11日と12日にはアメリカ戦争で枯れ葉剤散布によって破壊されたマングローブ林を10数年にわたる努力で見事に回復させた地域の現地観察が行われ、再生した立派なマングローブ林を見ることができた。いったんは荒廃したマングローブ林の修復とそれに関連する研究が精力的に今なお続けられている様子を目の当たりにすることができた。

マングローブ再生に関する実務的な研究は東南アジア各国でそれぞれ極めて熱心に推進されているが、マングローブそのものの学術的基礎研究はごく一部を除いてそれほど活発には行われていない。この点、オーストラリアを始め、ヨーロッパやアメリカの研究者らは基礎的な学術研究にかなり力を入れているように思われる。マングローブ林の保護のみならず荒廃したマングローブ林の修復のためには学術的基礎研究の成果は不可欠である。わが国の研究者や NGO も東南アジアのマングローブの研究に関して現にいろいろな形で熱心に参加協力しているが、現地の研究者との共同研究の推進は勿論であり、特に当該の人であって現地で継続的に研究活動が進められるような若手研究者の育成に協力すること、現地の状況と要望

を的確に把握した上で地域住民に本当に役立つような協力支援を行うことが最も重要であろう。

本セミナーは「エコトーン」シリーズとして行われた5回目のものであったが、最終日の討議を経て、次回は「エコトーンVI」として中国での開催を検討してもらうこととなった。

なお、本セミナーの内容と成果は、

Proceedings of the Ecotone V: Community

Participation in Conservation, Sustainable Use and Rehabilitation of Mangroves, 8-12 January 1996, Ho Chi Minh City-Vietnam (Editors: Phan Nguyen Hong, Natarajan Ishwaran, Hoang Thi San, Nguyen Hoang Tri and Mai Sy Tuan). 265pp.

として刊行されている。

(東京水産大学教授)

第6回 UNESCO/MAB 東・東南アジア地域セミナー：ECOTONE VI 中国・北海市（1997年3月18～21日）

鈴木 邦雄

東アジア・東南アジアの沿岸域は、急速に行われている各種開発によって環境破綻が深刻となり、グローバルにそして地域社会に多くの問題が発生している。UNESCOのMAB計画プロジェクトは、沿岸生態系の保全と持続的利用すなわち海と陸の2つの生態系が接する環境「エコトーン」をシリーズ・テーマとして1992年以来5回の地域セミナーを開催している。去る3月18～21日に中国の北海市において連続セミナーの第6回が開催された。今回のセミナーは「Zoning and Multiple Resource Use Schemes for Integrated Coastal Resources Development Planning and Management」をタイトルとして、3日のセミナーと1日のエクスカーションが行われた。



ECOTONE VI. 開会式（中国・北海市 中玉大酒店）

広西・北海市の中玉大酒店を会場としたセミナーは、主催者の中国国家海洋局、中国UNESCO国内委員会、中国MAB国内委員会に加えて、UNESCO地域事務所（ジャカルタ）と日本MAB国内委員会（有賀祐勝・東京水産大学教授）などの挨拶によるオープニングに始まり、5つのテクニカル・セッションで18題の発表と熱心な討議が行われた。参加は、タイ、バングラデシュ、ベトナム、フィリピン、インドネシア、香港、韓国、日本（有賀教授と鈴木の2名）と地元中国から政府関係者、国際機関専門家、沿岸管理担当者、研究者、NGOなど多岐にわたっていた。Dr. Zakir



広西壯族自治区と廣東省の境界付近にある山口（Shankou）自然保護区のマングローブ。後方にあるのは管理棟と研究棟。



山口自然保護区のマングローブ

Hussain (バングラデシュ, IUCN)による Key-note Speech: Current Status of the Management of Mangrove Forests in Asia , Dr. Han Nianyong による「中国の生物圏保護地域ネットワーク」, 韓国, フィリピン, タイなどから統括的沿岸管理計画 (ICM, Integrated Coastal Management) とゾーニング, 日本(鈴木), 中国から植物・鳥・多毛類(環形動物)から見たマングローブの生物多様性, ベトナム, 香港, 中国から沿岸生態系の持続的多元的および伝統的利用と生態系保全などの報告がなされた。そして, 最終日には, ECOTONE VIが総括された。

東・東南アジアの参加各国は, 生物多様性を保全するための自然環境保全地域のゾーニングおよび社会経済的側面と生態的側面とが協調する統括的沿岸環境のマネジメント (ICM) に熱心に取り

組んでおり, ICM によって沿岸域の生態系の持続的かつ適正な利用と保全が可能であるとの認識を持っていた。同時に, マングローブの保全と再生, 渡り鳥等に関する情報などは国際協力プロジェクトの一層の推進を求めていることが伺えた。 ICM (Integrated Coastal Management) と Biosphere Reserve との関連についても熱心な討議が行われた。筆者は, アジアの国々では人間と生物圏との歴史と現実を踏まえ, 原生自然をそのままの状態で保護する概念に加えて, 人間と自然(沿岸生態系など)との多元的な結びつきにサステイナブル・ディベロップメントのノウハウがあるので, それを評価するための研究や実践が進められているとの印象を抱いた。

第3日目のエクスカーションでは, 約100年前にマングローブの苗木が植えられ, 現在では素晴らしい樹林が広がっているShankou(山口)自然保護区を訪れた。雨の中ではあったが, 100年をかけて再生・創造されたマングローブ林への高い評価と技術的課題に熱心な討議が現場で行われた。

セミナーの合間を利用して開かれた幹事会では, 日本の財政的サポートに感謝が述べられた後, UNESCO/MAB の生物圏保存地域の普及と ECOTONE セミナーの意義が確認され, 今後もこのセミナーを存続させることになった。次回の開催国としてミャンマーが予定されている。

(横浜国立大学経営学部教授)

第14回「人間と生物圏(MAB)」計画国際調整理事会

1996年11月19~22日 (パリ, ユネスコ本部)

有 賀 祐 勝

ユネスコ・人間と生物圏(MAB)計画第14回国際調整理事会(ICC)が1996年11月19日から22日までパリのユネスコ本部で開催された。会議の概要は以下の通りである。

1. 開会

P. Bridgewater 議長の開会宣言に続いて

Badran ユネスコ事務局次長から挨拶があり, 参加者に対する歓迎の辞が述べられ, ①新しく科学担当の ADG として M. Iccarino (微生物学者) が就任したこと, ②昨年のユネスコ総会でビューローメンバーの数が, 副議長1名増となり, 議長を含めて6名になることが認められたこと, ③同総会で生物圏保存地域に関するセビリア戦略及び

規範的枠組み (Statutory Framework) が承認されたこと、④生物圏保存地域ネットワークの強化に努力が向けられていること、⑤「都市と沿岸域・島嶼」に焦点が当てられていること、⑥自然科学分野と社会科学分野の協力体制の確立が目指されていること、⑦ユネスコ関連の他のプログラム (South-South Cooperation, DIVERSITAS など) 及び ICSU や IUCN 等との協力体制を強化すること、⑧情報活動の強化、⑨文化と言語の多様性に注目すること、⑩ユネスコの人材育成と資金強化に努めなければならないこと、⑪デンマーク、ドイツ、オランダ等からアソーシエート・エキスパート制度等を通じて人的貢献があったこと、⑫生物圏保存地域に関するセビリア戦略に基づいて持続的開発及び経済的発展に向けた努力をすべきこと、⑬ユネスコのスローガンの一つである「人の心に平和を築くこと」、等が強調された。続いて、Iaccarino 新 ADG から簡単な挨拶があった。

2. 退任議長の報告

Bridgewater 議長から、昨年 6 月の ICC 以後現在までの活動報告があり、この 15か月間にビューロー会議が 1 回開催され、①セビリア戦略に基づく生物圏保存地域の優先的活動として地域ネットワーク化を推進したこと、②生物圏保存地域の定期的評価のための基準づくりをしたこと、③生物圏保存地域諮問委員会の検討を経て新たに 9 つの生物圏保存地域が承認され、全体で 85か国 337 地域が登録されることになること、④若手研究者への研究補助を決定したこと、⑤MAB の機能的自治 (functional autonomy) の問題について検討したこと、⑥生物圏保存地域の地図と解説書を作成したこと、⑦IUCN 主催の国際会議 (9 月、カナダ・モントリオール) で生物圏保存地域に関するワークショップを開催したこと、⑧CI (生物圏保存に関する国際 NGO) と協力してインターネット研修会を開催したこと、等が報告された。

3. 新ビューローの選出

ICC のメンバーは昨年のユネスコ総会の承認を経て 4 か国増え 34 か国になった。現在の理事国は次の通りである。

アルジェリア、アルゼンチン、オーストラリア、

オーストリア、ベニン、ブルガリア、カナダ、チャド、中国、コロンビア、コスタリカ、コートジボアール、エクアドル、エジプト、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、インド、インドネシア、イラク、イスラエル、日本、ケニア、レバノン、メキシコ、モザンビーク、ニジェール、ノルウェー、パナマ、ポーランド、ロシア、タイ、ザンビア

新ビューローは、アジア太平洋地域、ラテンアメリカ地域、アラブ地域、アフリカ地域、東ヨーロッパ地域、西ヨーロッパ地域から、次の通り選出された。

議長 Peter Bridgewater (オーストラリア)
(再任)

副議長 Wilson Torres Espinosa (エクアドル)
Mohamed Abdel Gawad Ayyad (エジプト) (再任)
Lambert Messan (ニジェール) (再任)
Istvan Lang (ハンガリー)
Josefine Heinz (ドイツ) (再任)

4. 議事日程の採択

原案を一部修正 (順序変更) して採択された。

5. 事務局報告

P. Lasserre 事務局長から前回 ICC (1995 年 6 月 12~16 日) 以後の活動について報告があった。主要な点は次の通りである。

- (1) 第 28 回ユネスコ総会 (1995 年) で、MAB 生物圏保存地域に関するセビリア戦略 (Seville Strategy) と規範的枠組み (Statutory Framework) が承認された。
- (2) 生物圏保存地域の地図と解説書を発行した (地図には不正確な箇所があるので、早急に改訂版を作成する予定)。
- (3) 生物圏保存地域国際ネットワークの機能について検討した。
- (4) 生物圏保存地域の地域ネットワークとして、Euro-MAB, Northern Sciences Network, 東アジア生物圏保存地域ネットワーク (EABRN), AfriMAB Network, ArabMAB Network, CYTED Network 等がそれぞれ活動している。

- (5) 生物圏保存地域のテーマ別ネットワークとして、Arid Zones, Tropical Zones, Mountains, ECOTONE 等が活動している。
- (6) カナダ, 中国, オーストラリアを始め多くの国で国内行動計画 (National Action Plan) が作成されている。
- (7) 姉妹生物圏保存地域 (Twin Biosphere Reserves), 提携生物圏保存地域 (Cooperative Biosphere Reserves), 境界間生物圏保存地域 (Transborder Biosphere Reserves) など生物圏保存地域間の連携の動きを支援した。
- (8) 熱帯林総合管理のための地域学校が開催された。
- (9) 都市 (Cities) 及び沿岸域・島嶼 (Coastal Zones and Islands) の2つのユネスコ学際プロジェクトにMABとして参加した。
- (10) DIVERSITAS, Peoples and Plants など他のユネスコ関連のプログラムに協力した。
- (11) 生物多様性条約, 砂漠化条約, IUCN 世界保護会議などとの協力強化に努めた。
- (12) 情報宣伝活動 (及び出版) として, InfoMAB No. 23 の発行, テレビ及びラジオ番組のドキュメンタリー作成に協力した。
- (13) UNESCO-MABnet の内容が充実し, 世界各地からアクセスできるようになっている。また, 各国 MAB 国内委員会のホームページとして, オーストラリア, 米国, カナダ, ノルウェーで開設され, また, ドイツ, フランス, スペイン, チェコ, メキシコ, 中国, マダガスカル, ニュージーランド, オーストリアで作成中である。
- (14) UNESCO-Cousteau Ecotechnie Programme, MAB 若手研究者研究補助金の交付などを通じて研修活動の強化に努めた。
- その他, MAB 関連の予算の執行状況について報告があり, 事務局の予算状況並びに人的状況について説明が行われた。1996-97年度の予算総額は962万ドルで, 通常予算の占める割合は22%となっている。また, 現在11名のスタッフが MAB を担当している。

6. 各国の活動報告

ブルガリア, ノルウェー, ポーランド, ロシア, チェコ, 米国, スロバキア, コスタリカ, パナマ,

- アルゼンチン, オーストラリア, インドネシア, タイ, 日本, 中国, ニュージーランド, インド, イスラエル, エジプト, ハンガリー, オーストラリア, ドイツ, フランス, フィンランド, カナダ, メキシコの順で, それぞれの国のMAB活動について報告が行われた。主な注目点は次の通りである。
- (1) 各国ともセビリア戦略に基づいて, 生物圏保存地域の活用を中心とする活動が行われ, 行動計画の作成, 管理計画 (評価基準) の作成, 新たな生物圏保存地域の設定, 実務研修, 青少年教育, ワークショップ, 地域学校の開設などに力が注がれている。
- (2) Transborder Biosphere Reserves 設定の努力がなされている。
- (3) ラムサール条約認定地域, 世界遺産条約認定地域などを通して, 他のプロジェクトとの協力が行われている。
- (4) 生物圏保存地域を利用した長期モニタリングが行われている。
- (5) Internet を活用した活動が活発化している。特に, 米国から①MABnet の様式の標準化, ②CI と協力した Internet に関するワークショップの開催, ③南北アメリカ大陸でのネットワークの構築などの取組みが紹介された。
- (6) セビリア戦略等の自国語への翻訳・出版が行われている。
- (7) テレビ番組による啓蒙活動が行われている。
- (8) 生物圏保存地域のための法的措置 (ポーランド), 生物圏保存地域に係る施策の見直しの実施 (米国) など一部の国において生物圏保存地域をめぐる政府政策レベルの動きが見られる。
- (9) NEC の支援による Internet や CD-ROM を利用したセミナーが行われている。

わが国の活動については, カントリーペーパーに基づいて, ①ニュースレター Japan InfoMAB No. 18 の発行, ②英文年報 Researches Related to the UNESCO's Man and the Biosphere Programme in Japan (1995-1996) の発行, ③東・東南アジア地域セミナー: ECOTONE-V (ベトナム) の開催支援, ④第4回東アジア生物圏保存地域協力会議 (EABRN-4) の開催 (鹿児島市・屋久島), ⑤東・東南アジア地域セミナー:

ECOTONE-VI（中国）の開催準備、⑥NEC-CI-Intelによるアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域の生物圏保存地域への技術・資金援助などを報告した。

また、各国の活動報告の中で、オーストラリアやカナダからMABの“M”(Man)が性的表現の観点から問題になっていることが指摘され、その取扱については会期中に関係者の非公式協議等を通じて検討されることとなった（付記I参照）。

7. 生物圏保存地域の地域ネットワーク

Northern Sciences Network, EABRN, IBAPの活動について報告が行われた。特にEABRNに関しては、鹿児島市及び屋久島で開催された第4回会議のまとめ（付記II参照）について、わが国から報告した。

8. 国際セミナー

会期中に国際セミナーが開催され、次の4テーマについて発表と討論が行われた。

(1) 青少年教育と訓練

“Eco-Ed”，子供達のための環境学校などに関して、Internet及びe-mail等の利用を含む青少年教育の重要性が議論されたが、特に子供達の教育に当たる教師のための環境教育ワークショップの必要性が指摘された。また、青少年に対する環境教育をNGO, ナチュラリスト, ボーイスカウト等が協力しながら実施することの重要性が指摘されたが、生物圏保存地域の管理に当たっている人々が十分な教育法を身につけていない場合があること、社会経済的側面をも考慮に入れた環境教育が必要であること等が指摘された。更に、教育訓練に最新のテクノロジーを最大限に取り入れて活用すべきことも論議された。こうした論議を踏まえ、カナダのイニシアティブで青少年の教育訓練強化のための提案が取り纏められ、報告書に盛り込まれた。

(2) 他のプログラムとの協力

DIVERSITAS, IHP, IOC, IGCPなどの環境科学プログラム及びMOSTなどの社会科学プログラムとの協力について報告され、特に各国レベルでの協力と調整に努力が必要であること、地球環境サミット以後何ができるかを明らかにすること、

また、South-South Cooperation, UNUとの協力で実績をあげているところもあり、IUCNとの協力は重要で、MABとIUCNの両事務局が協力分野について調整する必要があることなどが論議された。

(3) 地域生態系の管理

生物圏保存地域、保護地域、景観管理などの間には本来境界がなく、生物学的地域管理（Bioregional Management）及び生物文化管理（Biocultural Management）の考え方方が重要であることが強調された。

(4) 地域住民と生物圏保存地域：社会契約（Social Contract）に向けて

生物圏保存地域の管理と活用に関して、地域住民の参加は必須であり、専門家のみでなく、関連を持つ周辺の人々の支持が得られなければ管理と活用は成功しないことが強調された。また、科学的バックグラウンドを持ったキー・ダイアローグが重要で、トップ・ダウン方式で正しい説明を十分行うことの必要性も指摘された。

9. 生物圏保存地域に関するセビリア戦略と規範的枠組みの実施

事務局より、①MABの活動はセビリア戦略と規範的枠組みに基づいてすでに動いており、各國ごとの行動計画を作成し評価を行うことが重要であること、②Transborder Biosphere Reserve, Twin Biosphere Reserveや新たな生物圏保存地域の設定の努力が重要であること、③生物圏保存地域の評価様式は、アジア、アフリカ地域用が完成したこと（これは各國に強制するものでない）について説明があり、続いて討議が行われた。主な論議は以下のとおりである。

- IHPやIOCと共同の地域研究を積極的に行うべし（ドイツ）
- 世界保存モニタリングセンター（WCMC）との一層の連携協力を図り、MABnetの改善により新しいデータベースを備え、生物圏保存地域に関する記載の精度を高めるべし（カナダ）
- 生物圏保存地域の活用に関し、生態系の発展の経緯や文化的側面を重視すべし（オーストリア）
- 生物圏保存地域の定期的見直しの様式は、登録申請のための様式と同じであり、必ずしもその

- 目的に合致していないので、改善が必要（カナダ）
- ・生物圏保存地域の管理者の研修などアフリカ地域のニーズに対応した事業に重点を置く必要あり（コートジボアール）
 - ・セビリア戦略に呼応し、生物圏保存地域の発展の過程に関する総合的な科学的研究が必要（メキシコ）
 - ・ユネスコ本部、ユネスコ地域事務所、各国MAB国内委員会等の連絡を密にし、連携を強化すべし（インドネシア、コスタリカ）
- また、議長から、次回の会合に生物圏保存地域の評価様式を提出するよう事務局に要請があった。

10. MAB 計画の今後の発展

(1) 若手研究者への研究補助

事務局から提出された文書に基づき討議が行われ、①女性研究者への援助を増やすこと、②国際旅費をある程度フレキシブルに使えるようにすること、③生物圏保存地域とセビリア戦略の実行を対象とした研究に重きを置くこと等の原則が確認されたほか、課題となっていた年齢制限（現行では35歳以下）の緩和については、各國ごとに35歳以下の候補者2名と40歳以下の候補者1名を推薦できることとした。また、①選考に当たってのルールとガイドラインを明確にすること、②女性研究者の推薦が多くなるようMAB国内委員会も責任を持つこと、③発展途上国に重点を置くこと、④研究終了後の報告書はMAB国内委員会を経由して提出すること、⑤基金増額に事務局並びに各國とも努力すること等が確認された。

(2) 他のプログラムとの協力

事務局から、他のプログラムとのパートナーシップ、共同行動（joint operation）、共同研究（collaborative programme）、などを中心とするMAB国際調整理事会のこれまでの方針及び①DIVERSITAS、②People and Plants、③South-South Cooperation、④Sacred Sites, Cultural Integrity and Biological Diversity等との協力を推進すべき旨の説明があり、討論が行われた。

生物圏保存地域を活用した協力、特にIUCN（カナダ）やDIVERSITAS（ドイツ）との協力などについて提案があり、わが国からは、地域協力

から開始するのが重要であること、MABとDIWPA（西太平洋・アジア DIVERSITAS国際ネットワーク）の協力がすでに開始されていることを紹介した。できることから協力を開始することが重要であり、討議を踏まえ、次回ビューロー会議までに協力方針案を事務局で取りまとめることがとなった。

(3) 新たな挑戦、新たなパートナーシップ

地域住民参加の必要性とその意義についての論議が行われた。地域住民の経済的文化的向上に役立つような生物圏保存地域でなければならないという原則から、地域住民や一般市民への生物圏保存地域に関するPRが必要であることが強調された（アルゼンチン）。なお、文書中の“社会契約”（social contract）の概念や「生物圏保存地域における経済的インセンティブの研究のためのケーススタディ」の提案について、具体的内容の明確化が求められ、事務局において更に検討することとなった。

11. MAB 計画の今後の管理

冒頭、事務局から、①機能的自治（functional autonomy）そのものが粗いではなく、権限の委譲（delegation of authority）に主眼があること、②事務局において特定の考え方を押しつける提案ではない旨の説明があり、討議が行われた。

独立の事務局設置など機能的自治については、わが国を含めほとんどの国（フランス、イタリア、コロンビア、ベニン、メキシコ等）からMABの将来に関わる政策課題であり、十分な時間をかけて慎重に取り組むべきであるとの意見が相次いだ。特に、フランスとイタリアからは、ユネスコ全体で厳しい財政状況にあり、また、IOCの機能的自治の議論が進行中であり、その議論の見極めが必要であるとの意見が出された。また、機能強化の観点からは、分権化の一層の推進や地域事務所の活用が指摘された。

わが国からは、対処方針に基づき、①MABの財政基盤の強化、機動的な事業実施の観点からの一定の権限委譲の考えを支持するものの、機能的自治、規約の改正の問題は、政治的・財政的意味合いが大きく、IOCの議論の推移を見極めることが必要であること、②WGの設置については反対

しないものの、その検討事項、構成、検討期間等についてビューローで再検討すべき旨指摘した。

各国の討議を受け、Glaser 環境科学プログラム調整官から、MAB 計画の基盤強化や分権化への支持をノートすると共に、機能的自治に関する各意見等は事務局長や科学 ADG に伝達する旨の回答があった。

なお、事務局提案のWGの取扱について、ビューローで非公式に協議の結果、わが国の提案に沿って更に次回ビューロー会議（1997年4月予定）において WG の在り方について再検討することになった。議長から、併せて、WG はオープン・エンドにすること、常駐代表部の参加を検討すること、また、本件に関する各 MAB 国内委員会の意見をビューロー会議に提案することを求めることが、について説明があった。

また、地域の人的基盤の強化に関連して、EuroMAB 事務局設置（ノルウェー等）、ラテンアメリカ（モンテビデオ）地域事務所の MAB 担当ポストの補充（コロンビア、メキシコ）、アラブ・アフリカ地域担当ポスト（本部）の維持・補充（ニジェール）に関する要請があった。

12. 情報とコミュニケーション

MABnet の構築状況について事務局から説明があり、MABnet と CD-ROM (アマゾン) のデモンストレーションが行われた。多くの国から質の高さを評価する意見が出ると共に、事務局から、かなり多くの国が生物圏保存地域並びにその活動について多くのデータを入力しており、今後、未入力の国の協力が急を要する問題であり、各国とも協力してほしい旨の要請があった。また、各国から、MABnet がどのように利用できるかを外部にむけて宣伝する必要があり、そのためのインフォメーションやオリエンテーションについて考えていく必要があるとの意見が述べられた。

Lasserre MAB 事務局長から、MABnet タスクフォースをつくり、e-mail 等も活用しながら検討を進めるので、この分野に理解のある関係者の協力、特にテクノロジーの先進国である日本その他の国々の積極的な協力が要請された。各国において協力者があれば、2～3週間の間に事務局宛連絡することになった。

13. 次回（第15回）MAB 国際調整理事会の開催

1998年11月初旬を目標に準備することになった。また、次回ビューロー会議は1997年4月第3週に開催することになった。

14. 報告書審議

今回の MAB 国際調整理事会の報告書がラボルトゥールから提示され、若干の追加・修正を加えて承認された。

15. 閉会

Bridgewater 議長から、今後 2 年間にわたり議長としてまたビューローとして全力を尽くすことがあらためて表明され、事務局、ビューローメンバー、同時通訳に対する感謝が述べられ、閉会となった。

なお、本会議の出席者はオブザーバー等を含めて66か国（地域、団体を含む）156名であった。わが国からは、有賀祐勝東京水産大学教授と義本博司ユネスコ代表部一等書記官が出席した。

（会議所感）

今次会議は Bridgewater 議長のすぐれた指導力の下で順調に進行し、理事国以外の出席者もほとんど平等に発言し、活発な討論が行われ、なごやかな良い会議であった。

わが国が代表して報告した東アジア生物圏保存地域ネットワーク (EABRN) の活動は、極めて高い評価を受けた。

セビリア戦略に基づいて、国内行動計画の策定、ホームページの作成、定期的報告への準備などに取り組んでいる国が多く、また、各国とも新たな生物圏保存地域を設定したり、生物圏保存地域を有効に利用した活動を強力に推進しており、MABnet へのデータ入力を始めわが国の取り組みの立ち遅れを強く感じた。今後、MAB 国内委員会等において、関係者の支援体制の強化、MAB 計画に関心のある企業や NGO との連携、外部資金の導入方策等についての検討が早急に必要である。

なお、CI を通じた NEC の MAB への技術協力

もあってか、MAB活動に関する日本への期待は非常に大きいものがあり、わが国のMAB活動の現状を思うと過度の期待に対する恐れさえも感じさせられる程であった。

付記Ⅰ

MABの名称、特に“M”の問題については、カナダ代表を世話人とする有志の非公式会合で検討が行われ、その結果が3日目の会議で報告された。

MABの“Man”はもともと性差別とは関係なく、gender-neutralな言葉であり、20年以上にわたって長く続いているプログラムの名称変更は好ましくなく、むしろ混乱を招くおそれがあり、今後も引き続き“MAB (Man and the Biosphere)”

を用いた方が良いというのが大勢の意見であった。しかし、誤解を避けるために次の2つのうちのいずれかを採用するのが良いであろうとの提案であった。

- (1) MABとして、性差別の意図はまったくないとのステートメントを出す。
- (2) MABに副題を併記する（例えば、“Working for Sustainable Future Development of Humankind”）。

討議の結果、副題を併記することとし、“Working towards a Sustainable Future for People in the Biosphere”が提案されたが、なお表現振りはビューローと事務局で更に検討することとなった。

付記Ⅱ

EABRN : 4th Meeting

Kagoshima University and Yakushima Island Biosphere Reserve

21–25 October, 1996

DRAFT CONCLUSION AND RECOMMENDATIONS

1. The Meeting noted the progress made in network interaction and development, since its formalization at the last EABRN meeting. It welcomed the improved information and communication service through the MABnet development, which may play an important role in the networking of biosphere reserves. In particular the Meeting noted a strong common interest now emerging within EABRN in trans-border biosphere reserve development, ecotourism, enhancing public awareness of the planning, conservation and development benefits of biosphere reserves, and establishing linkages between biosphere reserve development and wider school education.

2. Specific mention was made of possible trans-border biosphere reserves between PR China and DPR Korea (Changbai / Paekdu Mountains); PR China and Nepal (Qomolangma / Makalu-

Barun – Mount Everest); PR China, Mongolia and Russia (Xilinglo – Dalaihu/Eastern Steppe – Nomgrog – Dausky); Mongolia and Russia (Uvs Lake Basin); as well as areas between Thailand and Myanmar.

3. Emphasis in discussion was placed on continuing the strategy of specific focus on prioritised issues for each EABRN meeting with adequate prior support and continuing follow-up of associated research and training capabilities.

4. Towards strengthening the Network's support for Member States on these issues, the Meeting recommended that:

- (1) the 5th EABRN Meeting should focus on ecotourism and commence more detailed discussions on transborder biosphere reserve

development in this region;

(2) the UNESCO MAB-ICC be requested to pay particular attention to identifying ways in which the MAB programme can:

(i) provide information and resources to support the EABRN's initiatives in trans-border biosphere reserve development; and,

(ii) strengthen and intensify actions to further support research and training enhancing the development of ecotourism across the region;

(3) UNESCO

(i) prioritise project and training support to EABRN across Sectors in the immediate future to strengthen actions that support ecotourism studies and development;

(ii) develop cross-Sectoral activities to support public awareness concerning biosphere reserves as well as school environmental education that capitalises on opportunities provided by biosphere reserves; and,

(iii) provide support for developing EABRN and national MABnet information services and enabling people to participate in the planned MAB electronic fora on specific themes.

5. The Meeting further considered the application of biosphere reserve concepts to urban situations, and recommended that:

(1) UNESCO MAB-ICC consider ways of further exploring and promoting the concept of biosphere reserve in urban ecosystems, with particular attention to providing input to

EABRN; and,

(2) EABRN should consider ways in which the application of biosphere reserve concept in urban areas can be further developed in the EABRN Member State context.

6. The Meeting unanimously accepted with appreciation the offer of Mongolia to host EABRN-5, to be held in August, 1997 in Ulaanbaatar. The Meeting noted that the Boghd Khan Uul Biosphere Reserve, which is close to Ulaanbaatar and Zuun Mod cities, may serve as a good location to identify issues related to biosphere reserve application in urban areas, as mentioned in the above paragraphs.

7. The Meeting requested UNESCO to contact DPR Korea and inform the colleagues working for DPR Korea-MAB, who were not able to come to this event in Kagoshima, of the conduct and the results of EABRN-4. It was sincerely hoped that all EABRN members could meet at the EABRN-5 in Mongolia in 1997.

8. The Meeting also noted the importance for all EABRN members to pay particular attention to early notification of delegates and timely response to organizational correspondence. It was suggested that EABRN members use as much as possible e-mail to improve communication to this end.

9. Furthermore, the Meeting noted with appreciation the collaboration across UNESCO offices in Beijing, Jakarta and Paris that provided the support for EABRN-4.

10. Finally, the Meeting expressed its appreciation to the Chair, Professor Aruga Yusho and the MAB National Committee of Japan, for the effective preparation and management of EABRN-4, to Kagoshima University and the

Government of Japan for hosting the Meeting,
and to the Government of Republic of Korea for
its financial support of both EABRN meetings
and projects.

お 知 ら せ

オランダにおける Degree Course 教育

オランダの国際高等教育機関 International Institute for Aerospace Survey and Earth Sciences (ITC) から1997年のDegree Course教育の資料がMAB/Japanに送付されてきました。関心のある方は、横浜国立大学鈴木邦雄教授 (E-mail: suzuki@business. ynu. ac. jp) または直接 education@itc. nl (www: http://www. itc. nl) まで連絡をお取りください。

Professional Master Degree Course

FOR.3 Forest Survey

FRD.3 Forestry for Rural Development

SIG. 3 Socio-Economic Information for Natural Resource Management

RLE.3 Rural and Land Ecology Survey

SOL.3 Soil Survey and Applications of Soil Information

USH.3 Geoinformation for Urban Planning

GIR/GIC/GIU.3 Geographic Information Systems for Cadastral/Urban Management/Rural Applications

MSC Degree Course

RLE.3 + ESM.2 Environmental Systems Analysis and Monitoring

☆ 日本のMAB計画委員会に以下の資料・文献が送られてきています。

Lib-no	Title	Author	volume	year
MABJ-0001	Domestication of Tropical Trees for Timber and Non-Timber Products	Leakey, Roger R. B., Adrian C. Newton Eds.	17	1994
MABJ-0002	Tropical Forests Integrated Conservation Strategies and the Concept of Critical Mass	Muul, Illar	15	1993
MABJ-0003	Towards a Global Terrestrial Observing System	Heal, O. William et al.	14	1993
MABJ-0004	Carbon, Nutrient and Water Balances of Tropical Rain Forest Ecosystems Subject to Disturbance	Anderson, Jonathan M., Thomas Spencer	7	1991
MABJ-0005	Biodiversity	Solbrig, Otto T.	9	1991
MABJ-0006	Extractivism in the Brazilian Amazon: Perspectives on Regional Development	Clusener-Godt, Miguel, Ignacy Sachs Eds.	18	1994

☆ 日本のMAB計画委員会に以下の資料・文献が送られてきています。

Lib-no	Title	Author	volume	year
MABJ-0007	Long-Term Monitoring of Biological Diversity in Tropical Forest Areas	Dallmeier, Francisco Ed.	11	1992
MABJ-0008	Rapid Sea Level Rise and Mangrove Habitat	Kikuchi, T. Ed.		1995
MABJ-0009	Ecosystem Rehabilitation of the Rural Landscape in South and Central Asia: an Analysis of Issues	Hadley, Malcolm Ed.		1994
MABJ-0010	Biosphere Reserves	Unesco	1,2	1994-1995
-11				
MABJ-0012,	Biodiversity News 13, 78	MAB	2-4	1992-1955
MABJ-0014	Tropical Cities: Managing their Water	Gladwell, John S., Low Kwai Sim	4	1993
MABJ-0015	Integrated Water Resource Management	Hufschmidt, M. M., K. G. Tejwani	5	1993
MABJ-0016	Women in the Humid Tropics	Rodda, Annabel	6	
MABJ-0017	Co-operative Scientific Study of East Asian Biosphere Reserves -18	MAB-Unesco/Jakarta, Indonesia		1995-1994
MABJ-0019	Kinabalu Park and the Surrounding Indigenous Communities-Malaysia	Nais, Jamili	17	1996
MABJ-0020	The Coastal Environment and Ecosystem in Southeast Asia: Studies on the Lake Songkhla Lagoon System, Thailand	Kuwabara, Ren Ed.		1995
MABJ-0021	Regional Meeting on Intergrated Ecological Research and Conservation Activities in the Northern Mediterranean Countries	Unesco-MAB	36	1977
MABJ-0022	Workshop on Tropical Peat Ecosystem in the Coastal Areas of Peninsular Malaysia and Southern			1989
MABJ-0023	Ecology Chronicle	United Nations/MAB		1991
MABJ-0024	Man Belongs to the Earth	United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization-MAB		1988
MABJ-0025	Unesco-Programm Der Mensch und Die Biosphäre-MAB -27	MAB-Mitteilungen	37, 38, 40	1996-1993
MABJ-0028	China's Biosphere Reserves	Chinese National Committee for MAB	3 (2)	1996
MABJ-0029, 30	info MAB	Unesco-MAB	21, 22	1994-1995
MABJ-0031 -33	South-South Perspectives	Unesco-MAB-UNU-Third World Academy of Sciences	1-3	1994-1996
MABJ-0034 -38	MAB Northern Sciences Network-NEWSLETTER	Unesco-MAB	14, 16-18, 20	1993-1996
MABJ-0039 -45	U. S. MAB Northern Sciences Network-NEWSLETTER.	Unesco-MAB	18 (3), 19 (2), 19 (3),	1994-1997

Lib-no	Title	Author	volume	year
MABJ-0046 -51	Unesco Nature and Resources	Unesco	20 (1), 20 (2), 20 (3), 21 (1) 22 (4), 23 (1), 28 (1), 28 (4), 30 (1), 30 (2)	1986-1994
MABJ-0052, 53	Forest Research Institute (FRI) Newsletter	Unesco		1994-1996
MABJ-0054	An Overview of UNESCO's Work on Island Environment, Territories and Societies	United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization		1994
MABJ-0055 -62	Wallaceana	Unesco	68 & 69, 71-73, 75 -78	1992-1996
MABJ-0064	Dinghushan Biosphere Reserve	Guohui, Kong, Liang Chun, Wu Huimin, Huang Zhongliang		1993
MABJ-0065	Conservation and Management of Biodiversity in a Changing Man-Nature System	Chiba University International Symposium		1996
MABJ-0066	The Journal of European Science Foundation-Communications	European Science Foundation/France	31	1994
MABJ-0067 -68	International Centre for Integrated Mountain Development-Newsletter	International Centre for Integrated Mountain Development- ICIMOD/Nepal	25, 26	1992-1996
MABJ-0069 -71	International Centre for Integrated Mountain Development-Issues in Mountain Development	International Centre for Integrated Mountain Development- ICIMOD/Nepal	1, 2, 3	1996
MABJ-0072	Principles for Sustainable Management of Global Forests	The Global Forestry Coordination and Co-operation Project		1992
MABJ-0073	Bridging the Americas: Migratory Birds in Costa Rica & Panama	Greenberg, Russel		1993
MABJ-0074	Smithsonian Opportunities for Research and Study in History/Art/Science	Office of Fellowships and Grants/Smithsonian Institution		1993-1994
MABJ-0075	A World of Discovery	Bello, Mark		1993
MABJ-0076	The Forestry Support Program	USDA, Forest Service, USAID, OICD		1994
MABJ-0077	Quest-National Museum of History	The Smithsonian Institution	1(4)	1992
MABJ-0079	Biodiversity Programs	National Museum of Natural History		
MABJ-0080	Highlights-Report of the Forest Service	USDA Forest Service		1993

* 文献・資料は、横浜国立大学経営学部鈴木研究室で保管しております



「人間と生物圏（MAB）計画」国内委員会

編集委員会

小倉 紀雄
岡崎 正規
原口 紘恵